

平成24年7月31日

北海道開発局

# サンルダム建設事業の目的別の総合評価(案)

## サンルダム建設事業の総合的な評価(案)

# 1 目的別の総合評価(洪水調節) (案) 1

- 「現計画案」、「河道掘削案」、「引堤+河道掘削案」、「遊水地案」、「雨水貯留・浸透案」の5案について、7つの評価軸（安全度、コスト、実現性、持続性、柔軟性、地域社会への影響、環境への影響）毎の評価は「第4回サンルダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場」の資料5-1に示すとおりである。
- ダム事業の検証に係る検討に関する再評価実施要領細目に示されている「⑤総合的な評価の考え方 i) 目的別の総合評価」（別紙）に基づき、目的別の総合評価（洪水調節）を行った。
- 目的別の総合評価（洪水調節）（案）

1) 一定の「安全度」（河川整備計画の目標流量 [萱平地点] 4,400m<sup>3</sup>/S) を確保することを基本とすれば、「コスト」について最も有利な案は「現計画案」である。

2) 「時間的な観点から見た実現性」として10年後に最も効果を発現していると想定される案は「現計画案」である。

3) 「環境への影響」については、「現計画案」では、サンルダム建設に伴い予測される動物等への影響について環境保全措置により最小化することとしており、「持続性」、「柔軟性」、「地域社会への影響」の各評価軸も含め、1)、2) の評価を覆すほどの要素はないと考えられるため、洪水調節において最も有利な案は「現計画案」である。

# 目的別の総合評価(新規利水) (案)

- 「現計画案」、「河道外貯留施設案」、「地下水取水(新設)案」、「地下水取水(既設井戸継続)案」、「既得水利権転用案」の5案について、6つの評価軸(目標、コスト、実現性、持続性、地域社会への影響、環境への影響)毎の評価は「第4回サンルダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場」の資料5-2に示すとおりである。
- ダム事業の検証に係る検討に関する再評価実施要領細目に示されている「⑤総合的な評価の考え方 i) 目的別の総合評価」(別紙)に基づき、目的別の総合評価(新規利水)を行った。
- 目的別の総合評価(新規利水) (案)

1) 一定の「目標」(利水参画者の必要な開発水量 合計1,640m<sup>3</sup>/日)を確保することを基本とすれば、「コスト」について最も有利な案は「現計画案」である。

2) 「時間的な観点から見た実現性」として、全案10年後に「目標」を達成されると想定される。

3) 「環境への影響」については、「現計画案」では、サンルダム建設に伴い予測される動物等への影響について環境保全措置により最小化することとしており、「持続性」、「地域社会への影響」の各評価軸も含め、1)の評価を覆すほどの要素はないと考えられるため、新規利水において最も有利な案は、「コスト」について最も有利な「現計画案」である。

## 目的別の総合評価(流水の正常な機能の維持) (案)

- 「現計画案」、「河道外貯留施設案」、「ダム再開発案」、「水系間導水案」の4案について、6つの評価軸(目標、コスト、実現性、持続性、地域社会への影響、環境への影響)毎の評価は「第4回サンルダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場」の資料5-3に示すとおりである。
- ダム事業の検証に係る検討に関する再評価実施要領細目に示されている「⑤総合的な評価の考え方 i) 目的別の総合評価」(別紙)に基づき、目的別の総合評価(流水の正常な機能の維持)を行った。
- 目的別の総合評価(流水の正常な機能の維持) (案)

1) 一定の「目標」(河川整備計画の目標における流水の正常な機能の維持に必要な流量[名寄川真勲別地点]かんがい期で最大概ね6.0m<sup>3</sup>/s、非かんがい期で概ね5.5m<sup>3</sup>/s)を確保することを基本とすれば、「コスト」について最も有利な案は「現計画案」である。

2) 「時間的な観点から見た実現性」として、10年後に「目標」を達成することが可能となると想定される案は「現計画案」である。

3) 「環境への影響」については、「現計画案」では、サンルダム建設に伴い予測される動物等への影響について環境保全措置により最小化することとしており、「持続性」、「地域社会への影響」の各評価軸も含め、1)、2)の評価を覆すほどの要素はないと考えられるため、流水の正常な機能の維持において最も有利な案は「現計画案」である。

# 総合的な評価(案)

- ダム事業の検証に係る検討に関する再評価実施要領細目に示されている「⑤総合的な評価の考え方 ii) 検証対象ダムの総合的な評価」(別紙)に基づき、検証対象ダムの総合的な評価を行った。
- 総合的な評価(案)

治水(洪水調節)、新規利水、流水の正常な機能の維持について目的別の総合評価を行った結果、最も有利な案は「現計画案」となり、全ての目的別の総合評価の結果が一致した。よって、総合的な評価において、最も有利な案は「現計画案」である。

# ⑤総合的な評価の考え方（別紙）

## i) 目的別の総合評価

洪水調節を例に、目的別の総合評価の考え方を以下に示す。

①に示すように検証対象ダム事業等の点検を行い、これを踏まえて①に掲げる治水対策案の立案や③に掲げる各評価軸についての評価を行った上で、目的別の総合評価を行う。

③に掲げる評価軸についてそれぞれの確な評価を行った上で、財政的、時間的な観点を加味して以下のような考え方で目的別の総合評価を行う。

- 1) 一定の「安全度」を確保（河川整備計画における目標と同程度）することを基本として、「コスト」を最も重視する。なお、「コスト」は完成までに要する費用のみではなく、維持管理に要する費用等も評価する。
- 2) また、一定期間内に効果を発現するか、など時間的な観点から見た実現性を確認する。
- 3) 最終的には、環境や地域への影響も含めて③に示す全ての評価軸により、総合的に評価する。

特に複数の治水対策案の間で「コスト」の差がわずかである場合等は、他の評価軸と併せて十分に検討することとする。

なお、以上の考え方によらずに、特に重視する評価軸により評価を行う場合等は、その理由を明示する。

新規利水、流水の正常な機能の維持等についても、洪水調節における総合評価の考え方と同様に目的別の総合評価を行う。

なお、目的別の検討に当たっては、必要に応じ、相互に情報の共有を図りつつ検討する。

## ii) 検証対象ダムの総合的な評価

i) の目的別の総合評価を行った後、各目的別の検討を踏まえて、検証の対象とするダム事業に関する総合的な評価を行う。目的別の総合評価の結果が全ての目的で一致しない場合は、各目的それぞれの評価結果やそれぞれの評価結果が他の目的に与える影響の有無、程度等について、検証対象ダムや流域の実情等に応じて総合的に勘案して評価する。検討主体は、総合的な評価を行った結果とともに、その結果に至った理由等を明示する。

※ダム事業の検証に係る検討に関する再評価実施要領細目より抜粋